

ページ番号：1

タイトル部分は分かるように
(フォントサイズ大きく)

「見て、体験して、くつろぐ」系の町として栄えた往時を体験

★写真 1_001

長野電鉄・須坂駅から徒歩約 10 分、かつての大笹街道と谷街道が交差する町の中心部に現存する「旧小田切家住宅」。ここは酒造、米穀、油、蚕糸、呉服商などを営み、特に製糸業によって須坂の発展に貢献した豪商・小田切家の旧邸宅で、広大な座敷や美しい組子細工が施された欄間など、住時の繁栄ぶりを知ることができる貴重な建物です。

製糸業で栄えた須坂の歴史と、当時の人々の暮らしを今に伝える重要な遺産として、平成 25 年（2013）に「須坂市指定有形文化財」に、そして平成 30 年（2018）には須坂市の建造物では唯一の「長野県宝」に指定されています。

組子細工作りや結び紐、由緒ある建物でのティータイムなど、様々な体験が楽しめる

美しい書院欄間や組子欄間、主屋や歴代の主が使用していたお納戸などに見られる釘隠しなど、可愛らしくかつ贅沢な装飾が随所に施されている旧小田切家住宅では、隙の思い出づくりやお土産にもぴったりな体験ワークショップが用意されています。

まずは住居内の欄間に日本の伝統工芸「組子細工」が取り入れられていることから始められたという「組子細工コースターづくり」。9 本の木を組んで作る六角麻之葉組木といわれる模様の組子で、完成品を見ると果たして上手くできるかと不安になるかもしれませんが、心配に無用。あらかじめ用意された 9 つの木片を、図面を見てレクチャーを受けながら順番通りに組めば仕上がりますし、もし万が一、木が割れてしまった場合でも、そのパーツを補充してもらえます。所要時間約 15 分程度で素敵なコースターの出来上がり。記念に持ち帰るもよし、プレゼントにするもよし、職人気分を体験できるコーナーです。

続いては「結びの樹」の組結び体験。敷地内にある、杏、ツルマサキ、イデイの 3 種の樹木が自然に絡み合ってきたことから縁結びとして親しまれている「結びの樹」に願い事を込め、菊結びをして、樹に結ぶワークショップを行っています。こちらも手順通りに紐を待ち針に絡めながら進めていけばキレイに仕上がります。ご縁を大切にしたい小田切家のパワーにあやかりたいものです。

また併設されたカフェでは、お抹茶セットやオリジナルスイーツをコーヒーやジュースなどと楽しみ、入館料を払うと館内のお好きな場所で楽しむことができます。

ページ番号：1

写真挿入部分を分かるように
(赤字で写真の番号を表示)
※写真説明文も文字表示

★写真 1_002 (組子細工コースターづくり)

★写真 1_003 (旧小田切家住宅の緑側でお抹茶セットやオリジナルスイーツをいただく)

小田切家のルーツ

小田切家の起源は平安時代末期まで遡り、武将・海野氏が信濃佐久郡小田切（現・長野県佐久市白田上小田切・中小田切・下小田切）に住み、小田切を称したのが始まりとされています。須坂市の小田切家も海野氏の出であると考え、安土桃山時代には上杉景勝等に仕えた武将でした。

しかし関ヶ原の敗戦によって会津への国替えを命ぜられた際、小田切氏は会津へは行かず、武將を辞め、須坂に移り住み、商人になったと云われています。

江戸時代から須坂で商いを始めた小田切家は、酒造、米穀、油、蚕糸、呉服商などを営み、須坂藩堀氏の御用達を務めるほどの豪商になったとされ、12 代当主小田切辰之助の代になると製糸業で財を成しました。

旧小田切家住宅の 2 号土蔵では、上杉景勝から当時の当主・小田切四郎太郎に宛てた書状のレプリカの展示を見ることができます。

また、武家屋敷のような外観の屋根瓦の角には小田切家の家紋「丸に三つ目結」が施されていますが、これはかつて武將だった時代には下にもう一つ四角がついていたものの、武家を辞めて商人になったということで四角の一つ取ったとされています。

★写真 1_004 (小田切家の家紋「丸に三つ目結」の屋根瓦の角)

須坂の発展に尽力した小田切辰之助

小田切辰之助（1839～1904）は、江戸後期から明治期の製糸家で、安政 6 年（1859）の横浜開港に伴い盛んになった生糸や蚕種（さんしゅ／蚕の卵で、紙に産み付けた状態で取引された）の貿易に尽力した人物です。

当時、日本産の蚕種は輸出における最重要品目として大量に輸出されていましたが、目先の利益を優先し、粗悪な生糸や蚕種が横行して海外の信頼を失うこととなり、その状況を懸念した政府は、明治 5 年（1872）、蚕種製造を取り締まる「蚕種大総代」を設け、辰之助は翌年、長野県の大総代に選ばれました。